

「初めての訪中で感じたこと」

2 A 青森中央学院大学 蝦名彩

初めて中国という国を訪れてみて、中国人は自分の感情を素直に他者へ発信する人たちだと感じた。その性格は良くも悪くも正直であり、日本人のように本音を隠しがちな国民性とは対照的であった。だからこそ、日本人ももっと自分に素直になり、相手に想いを伝えることができれば、この日本という国はもっと発展し、より良い社会になるのではないかと改めて感じた。

ここからは私の個人的な感想になる。私はこれまで、中国についてはネットの情報やニュースでしか知らず、どこか怖い印象を持っていた。正直なところ、政治的なイメージや過去の歴史問題などから、身構えていた部分もあった。しかし、実際に訪れてみると、万里の長城をはじめとする壮大な歴史遺産や、現地の大学生たちとの交流を通して、想像していた中国とはまったく違う姿を目の当たりにした。大学生たちはとても気さくで、こちらの意見にも真剣に耳を傾けてくれた。また、自分の考えも率直に伝えてくれる姿勢が印象的であり、互いにリスペクトを持って接することができた。会話を通じて、国や文化が違っても、人と人とのつながりには普遍的な温かさがあるのだと実感した。

料理についても、事前に抱いていた「油っこい」などのイメージとは異なり、どれも非常においしかった。とくに現地で食べた郷土料理や火鍋は、日本では味わえない独特の風味と深みがあり、また個人的に食べに行きたいと強く思った。食文化を通して、その土地の人々の暮らしや価値観に触れられることを知り、大変興味深かった。

また、私自身、これまで他国の文化に触れたことがなかったため、今回の訪中で体験したことは非常に貴重であり、今後の人生の大きな財産になると感じている。中国の都市は大きく発展しており、日本の景観とはまた異なる風景を楽しむことができた。この一週間は毎日が新鮮で、飽きることなく、最後まで思いきり楽しむことができた。

この貴重な一週間で学んだこと、実際に感じたこと、そして思ったことを、姉や家族、友人たちだけでなく、この日中友好協会大学生訪中国を紹介して下さった先生方にも、すべて伝えたいと思った。

戦争に関する博物館を訪れた際には、子供からお年寄りまで幅広い年代の人たちが訪れており、多くの人々が熱心に展示を見ていたのが印象的だった。国の過去に真摯に向き合い、その想いを次の世代にしっかりと引き継いでいこうとする姿勢に、私は驚き、そして感動した。戦争の記憶を風化させず、未来の平和のために語り継ぐことの重要性を改めて感じた瞬間でもあった。

今回の訪問を通じて、中国という国は、メディアで描かれるような一面的なイメージだけでは捉えきれない多様な側面を持っていることを学んだ。人々は親切で温かく、文化や歴史にも誇りを持って生活している。そのような国と、これからの未来に向けて手を取り合っていくことが、アジア全体の平和と発展にとって重要だと思う。

日本と中国という二つの国だけではなく、世界全体が互いを理解し、尊重し合いながら、平和な未来を築いていくことが求められている。今回の経験は、そのことを胸に深く刻み込むきっかけとなった。自分自身も、国際社会の一員として何ができるのかを考え続けていきたい。

「私たちがまだ知らないこと」

2A フェリス女学院大学 大山実咲

今回、私は訪中団に参加した理由は、大学で学んでいる中国語を実際に活かし、中国の文化や人々に直接触れてみたいと思ったからである。教室で学ぶ言葉や知識だけでは分からない、現地ならではの歴史や文化、人々の温かさを肌で感じたいという思いがあった。

まず強く印象に残っているのは、9.18 歴史博物館の訪問である。ここでは、日本では触れる機会の少ない日中の歴史について学ぶことができた。展示を見ていく中で、驚きとともに胸が締め付けられるような悲しさを覚える場面も多々あった。もし訪中団として現地を訪れていなければ、この歴史の重みを知る機会にはなかったかもしれない。だからこそ、この地で学ぶことができたことを心から良かったと思う。辛い過去があるにもかかわらず、日本を好きだと語ってくれる中国の人々がいるという事実がとても嬉しいものだと思えて実感した。同時に、私たち日本人がこの過去を知らずにいることの危うさも感じた。訪問を通じて学んだことを自分の中に留めるのではなく、まだ知らない人々に伝えていくことこそが、今回の経験を活かす道だと思う。過去を正しく理解することが、今後の日中関係をより良いものにしていく第一歩になると強く感じた。

また、中国の大学を訪問し、現地の学生と交流できたことも大きな思い出である。多くの友人ができ、そのうちの何人かとは今でも WeChat を通じて会話を続けている。日本のアニメや漫画が好きだと話す学生も多く、共通の趣味を通じてすぐに打ち解けることができた。私はまだ流暢に中国語を話せず、思うように伝えられない場面もあったが、ジェスチャーを交えながら一生懸命気持ちを伝えることで、相手に理解してもらえた瞬間は大きな喜びであった。ぎこちない中国語で話しても、相手が笑顔で「上手だ」と褒めてくれたり、真剣に理解しようとしてくれる姿に触れ、言語や文化の違いを越えて心がつながる喜びを実感した。今年中に日本を訪れる予定だと話してくれた友人もあり、その際にはぜひ日本の魅力を紹介したいと考えている。

この訪中団を通じて学んだことは、単なる一時の体験ではなく、これからの人生において忘れることのない貴重な思い出である。歴史を知る大切さ、文化の違いを乗り越えて分かり合える喜び、人々の温かさ、そのすべてが心に深く刻まれている。今後は、自らが体験した中国の良さや中国の人々の優しさを、まだ知らない人々に広めていきたい。そして、一部の人間で国の印象を決めつけてはいけないと感じた。

今回の訪中団への参加は、私にとって一生忘れられない経験である。体験しないとわからないことがあること、まだまだ知らないことがたくさんあると実感した。この経験を糧に、さらに中国語の学習を深め、中国とのつながりを大切にしながら歩んでいきたいと考えている。さらに、この経験は語学力の向上だけでなく、異文化を理解する姿勢を育む大きなきっかけとなった。今後は大学での学びをより深めるとともに、将来は国際交流の場で今回の経験を活かし、日中の友好関係の発展に貢献したいと強く思う。

「リアルな中国を知る」

2A 愛知県立大学 梶浦大希

【はじめに】

私は今回の訪中団に参加するにあたり、「学ぶ立場から発信する立場へ」という目標を掲げ、中国に関する正しい知識を身につけたいと考えました。以前の私の中国に対するイメージは、「大気汚染がひどい」「料理が辛い」「高い建物が多い」といった漠然としたものでした。しかし、7日間にわたる現地での生活を通して、中国を五感で体験し、これまでの価値観を見つめ直すきっかけとなりました。

【都市ごとの違い】

今回訪れたのは、北京・長春・瀋陽の3都市です。一口に中国といっても、その広大な国土において都市ごとに特色が大きく異なることを肌で感じました。北京は首都ということもあり、外国人観光客も多く見られました。万里の長城、故宮、北京国家体育館などを訪れ、その建築物の壮大さに圧倒されると同時に、中国の4000年の歴史の深さを実感しました。

長春は今回訪れた都市の中で最も北に位置し、最高気温も24度程度と過ごしやすい気候でした。朝鮮半島に近いことから朝鮮料理が有名である点も印象的でした。

瀋陽は、日中の歴史において特に深い関わりを持つ都市です。後述する博物館の訪問もあり、ほかの都市とは異なる緊張感がありました。また、東北地方に位置するため方言も強く、私の中国語力では日常会話を聞き取るのが難しい場面もありました。

【博物館訪問】

7日間の訪中で最も印象に残っているのは、「九・一八」歴史博物館の訪問です。今回のプログラムでは、中国共産党歴史展覧館、東北陥落史陳列館など複数の博物館を訪れ、中国の歴史や経済、文化について学ぶ貴重な機会が数多く用意されていました。

中でも「九・一八」歴史博物館は、訪問日が9月18日の一週間前ということもあり、現地では記念日のイベントに向けたリハーサルが行われていて、緊張感に包まれていました。展示では、日本が引き起こした戦争の悲惨さや、残留孤児に関する史実などが詳しく紹介されており、目をそむけたくなるような内容もありました。日本ではあまり深く触れられないこれらの歴史を知ること、現在の二国間関係の背景をより深く理解することができました。

「歴史は最高の教科書である」という言葉が、すべての歴史博物館に共通して掲げられていました。この訪問を通じて、日本から見た歴史だけでなく、中国から見た日中関係にも目を向けることの大切さを実感しました。

【現地の人との交流】

今回の訪問では、吉林大学および遼寧大学の学生との交流プログラムもありました。現地の日本語学科の学生たちは、日本のアニメに興味を持ち、日本語の学習を始めたという人が多く、親近感が湧きました。

中国ではインターネットの規制により、YouTube や Instagram などの利用が難しいにもかかわらず、日本のサブカルチャーが中国本土にまで広がっていることに驚かされました。また、日本でも流行している「なるとダンス」は中国でも有名で、実際に踊れる学生もいました。遼寧大学との交流では、一緒にダンスやソーラン節を披露する機会もあり、言葉や国籍の壁を越えて楽しい時間を共有することができました。文化を通じた交流の力を、身をもって体験しました。

一方で、印象的な出来事もありました。瀋陽で自由時間に地元の人の話を聞こうと、70代くらいの女性に声をかけたところ、初めは気さくに話してくれたのですが、私が日本人だと伝え、「哦，你是日本人噢...」と言って、急にその場を離れてしまいました。悪意があったわけではないと思いますが、世代によって日本に対する印象や感情が異なることを肌で感じる出来事でした。この体験を通して、私たち若い世代が、より一層日中友好を深く考え、行動していく必要があると痛感しました。

【終わりに】

今回の訪中を通じて、中国の歴史や文化を深く学ぶことができました。今後は、当初掲げた「学ぶ立場から発信する立場へ」という目標を実現できるよう、学んだことを積極的に発信し、日中友好の架け橋となれるよう努めていきたいと考えています。

「歴史を知り、人を知り、未来をつなぐ留学体験」

2 A 朝日大学 加藤那奈

私が今回の訪中に参加しようと思った理由は、以前から日中関係が必ずしもいいとは言えない中で、その背景にあるものを自分の目で確かめたいと思ったからです。また、現地での交流を通して、将来の自分にできることや果たすべき役割を見つけられるのではないかと考え、この留学に参加しました。

今回の訪中は、9月8日から14日までの約一週間という短い期間でしたが、吉林省の長春、遼寧省の瀋陽、そして首都北京をめぐり、大学訪問や学生との交流会、博物館見学、歴史館見学など多彩なプログラムを体験することができました。まず印象にしているのは、吉林大学や遼寧大学といった教育機関での交流です。現地の大学生の皆さんは私たちを温かく迎えてくれ、文化や生活、趣味などについて他愛のない会話を楽しみました。会話の内容自体は特別なものではありませんでしたが、別れた後も WeChat アプリでつながり、「無事に帰国されましたか?」「またいつでも中国に遊びに来てください」など、私を気遣ってくれるメールを送ってくれる学生もいて、そのやさしさに深く心を打たれました。現地を訪れる前は、中国の人は反日感情が根強いのではないかという不安がありましたが、実際に会った学生や先生の皆さんはとても情が厚く、親切で優しく接してくれ、その先入観は大きく覆されました。同じ若者として将来やお互いのことについて語り合った時間は、私にとってかけがえのない経験となりました。

また、街の様子にも強く心を動かされました。SNSなどで目にする中国のイメージは、環境問題や混雑、貧困の格差といった否定的なものに偏りがちです。しかし、実際に訪れてみると、長春も瀋陽も北京も町は非常に整備され、清潔で活気に満ちていました。高層ビルが立ち並ぶ都市の風景や、便利に利用できる公共サービスなどからは、中国が急速に発展していることがはっきりと感じられました。自分が持っていた固定概念と実際の姿に驚き、現地を直接訪れることの大切さを痛感しました。

特に深い学びを得たのは、瀋陽で訪れた「九一八歴史博物館」でした。日本の学校教育でも満州事変や日中戦争について学びますが、実際に現地で資料や展示品を目にすると大変心苦しく、自分は今まで知っているつもりになっていただけで、実際には何も知らないに等しかったのだと痛感しました。戦争の悲惨さを前にして、日本人が歴史を表面的にしか理解していない限り、本当の意味で中国の人々と心から繋がることはできないのではないかと思います。さらに博物館では、戦後に中国の方が日本の戦争孤児を育てて、日本に帰すまで面倒を見てくれたという歴史についても紹介を受けました。私はその事実をほとんど知らず、日本社会全体でも十分に共有されてないのではないかと感じました。そのような恩義に対して、私たちはどれほど感謝の気持ちを持ち続けているのか、自問せざるを得ませんでした。

また、博物館の展示を通して強く印象に残ったのは、中国が「日本を許さない」といっ

た姿勢をとっているのではなく、「過去の悲惨な歴史を繰り返してはならない」という強い思いから歴史を伝え続けている、という点です。決して日本国民を恨んでいるのではなく、未来への教訓として歴史を残しているのです。しかし日本側はそれを「反日」ととらえすぎてしまっている部分があり、それが日中関係をより難しくしているのではないかと考えるようになりました。

この留学を通して、私は歴史を学び直すことの重要性和、直接交流することの大切さを強く実感しました。相手を正しく理解するためには、教科書やメディアを通じた知識だけでは不十分で、自分の目で見て、耳で聞き、心で感じる必要があります。そして、歴史の悲劇を繰り返さないためにも、日本人として過去に真摯に向き合い、同時に現在の中国の人々とともに未来を築こうとする姿勢が不可欠だと学びました。

今回の訪中は、わずか1週間という限られた時間ではありましたが、私の価値観や考え方を大きく変えてくれる経験となりました。中国の歴史や文化に触れ、人々の優しさに触れ、そして中国の発展を目の当たりにしたことで、日中関係について遠い問題ではなく、自分の問題として考えるようになりました。今後は歴史の学びをさらに深めるとともに、中国の文化理解を続け、将来少しでも両国の架け橋となれるよう努力していきたいと思います。

「画面を通して見る「中国」とそうでない「中国」

2-A 班 静岡文化芸術大学 加藤李歩

中国を訪問する前の中国に対する印象は非常に悪い。大気汚染や、街中で怒鳴り散らかす中国人、規則を守らず周囲に迷惑をかける姿など日本のメディアでは特に中国に対する嫌悪感が激しく、それらが自然に私たちにも共有されている。私の身近な友達や家族に中国についての印象を聞くともちろん良い反応はなく、メディアの情報が中国を染めているのだと実感した。

私は、ある映画を見てから中国という国に興味を持ち始め、高校生の頃は世界史を選択していたことから、治安はどうであれ、中国について知識を深めるために中国へ訪れてみたい気持ちがあった。また、メディアを通して見る姿と実際に訪れて見る姿は何か違うのではないかという期待を込めて、巡り会えたこの機会に中国へ行くことを決意した。結論、訪中前に比べて中国に対する印象が 180 度変化したと言うことは出来ないが、最も印象が変化したことは中国人の人柄である。訪中前は、中国人に対して文章の冒頭で述べたような人柄がほとんどだと思っていたが、万里の長城を散策した際には、通りすがりに「こんにちは！」と声をかけられ、北京の街中を散策した際には「ありがとうございます！」など日本語が飛び交っていた。我々日本人として日本語で声をかけていただくことは実に喜ばしいことであり、私たちも挨拶を返した。また、9 月 13 日紅梅文創園見学にて屋台販売のたい焼きを購入した時、私が必死に中国語で注文していると、店員 2 人がニコニコ笑顔でその注文を聞いてくださり、味の種類を中国語で教えてくださった。帰り際には訪中の仲間も含めて 2 人の店員と記念撮影をすることが出来た。決して国民全員とは言えないが、中国にこのような優しく接して下さる方々が存在することに人との繋がりや輪が見出しているようで嬉しかった。

その他、訪中で最も衝撃だったことは、万里の長城の階段の高さである。メディアを通して見た万里の長城は、山なりに沿って続くイメージがあったが、実際に足を運んでみると、傾斜がほとんど直角並みで階段の 1 段の高さが自分の太ももまであったため、登るのに苦労した。その日は観光客の数が多く、体力の消耗と暑さにより階段の隅で座って休憩している人も見かけるなど時間をかけて長城を満喫する姿が多く見られた。個人的に、上りよりも下りに背筋が寒くなった理由として、階段の傾斜がほとんど直角なため足が竦むのと、登ってきた自分分のいる場所がとても高いのと相まって、1 歩踏み間違えたら落ちるイメージが常に頭の中に循環していた。ただ、上から見下ろすと「中華」という感覚がよく理解できた。時は遡り、春秋戦国時代や秦にかけて建設された万里の長城は、およそ 2000 年以上の動乱を経てなお顕在する中国の宝ともいえる。その歴史の一部に

私たちが足を運ぶことが出来たことを光栄に思う。

この訪中を通して、この年齢でこの時期にこの訪中団のメンバーとして中国へ行くことが出来て幸せだった。この期間で中国出身の方や学生、同じ訪中の日本人と交友を結び、連絡先を交換して友情を保つことは将来の学びを助け合うことに繋がり、自分自身の成長をサポートする大きな存在になる。また、実際に現地へ訪れてみることでしか分からないいくつかの面を発見する良い機会になり、物事に対する良い面も悪い面も、自分の知識と経験で判別するスキルが身につくことも期待できる。私は、他にもこのような事業があれば参加をしたいし、この訪中団の存在をよりたくさんの学生に知って参加をしていただきたい。

「SNS では見られない中国」

2-A 班 長野県立大学 久野ひなか

今回、私は訪中国の一員として中国に 1 週間滞在する機会を得た。訪中に参加した理由は、インターネット上で得られる中国のイメージと、実際に行った人の感想が大きく異なっていたからである。SNS やニュースで伝えられる中国の姿は、どこか偏っていたり極端に切り取られていたりするように感じていた。そこで、自分自身の目で確かめたいという思いから参加を決めた。

実際に訪れてみて、まず最初に気づいたのは街の清潔さだった。私は事前に、中国の街はごみが多い、空気が汚い、といったイメージを持っていたが、それは大きな誤解だった。確かに人が多く、観光地には活気があふれていたが、街自体は想像以上に整っており、ゴミ箱の数も日本より多いのではないかと感じるほどだった。人の往来が激しいのにも関わらず、道が比較的きれいに保たれていたのは印象的である。

もちろん、ネットでよく取り上げられる偽物商品も存在はした。観光地では有名キャラクターに似たグッズを目にすることもあった。しかし、想像していたほどあふれているわけではなく、むしろ限られた場所に点在しているという印象を受けた。短い滞在期間の中では偽物だらけの国というイメージは当てはまらなれなかったと感じた。

次に印象に残ったのは、観光スポットの美しさである。歴史的な建築物や整備された庭園は、写真や映像で見たことがあるはずなのに、実際に訪れてみるとその迫力と雰囲気はまったく別物だった。建物の規模の大きさや装飾の細かさには圧倒され、改めて中国の歴史と文化の奥深さを実感した。私はこれまで中国のものは壊れやすい、という偏ったイメージを抱いていた。しかし、1 週間の滞在だったということもあり訪問中にそのような印象を受けることはなかった。

人々の暮らしに触れる中で特に気になったのは化粧の違いである。中国の女性は日本の女性とは異なるメイクの仕方をしており、観光地では派手なメイクと中華風の衣装を合わせて写真を撮っている人を多く見かけた。ネット上でよく見る動画と同じような光景が実際に存在していて、これはネットのイメージと一致していた部分である。一方で、普段街中で出会う女性たちの化粧は多様であり、日本と似ているところもあれば、はっきりと異なる特徴もあった。こうした違いに触れることで、文化や美意識は国によって本当に変わるのだなと実感できた。

さらに忘れられないのは、滞在中にお世話になったガイドの方の存在である。その人はとても穏やかで親切だった。私たちに自由に行動させてくれる一方で、熱心に中国の歴史について教えてくれた。観光の説明だけでなく、雑談の中でも中国の生活や文化を教えてくれ、私たちが快適に過ごせるよう細やかな配慮をしてくれたのが印象的である。自由だけど人思いという言葉がぴったり当てはまる方で、その人柄に触れることで中国の人々の温かさを感じることができた。私が抱えていて中国人像が覆された瞬間でもあった。

このように、私が訪中前に抱いていた中国のイメージは部分的には正しく、部分的には誤っていた。確かにネットで言われるように偽物商品や派手なメイクをする観光客は存在したが、それは中国全体を表すものではなく、あくまで一側面にすぎない。むしろ、街の清潔さや観光地の広大さ、食事の豊かさ、そしてガイドの方の人柄など、実際に訪れなければ分からない魅力の方が強く印象に残った。

今回の訪中を通して学んだのは、情報を鵜呑みにしないことの大切さである。インターネットやメディアから得られる情報は便利で早いですが、それだけでは一国の姿を正確に理解することはできない。実際に足を運び、自分の目で見て、耳で聞き、体で感じることによって初めて気づけることがある。今回の経験は、中国という国に対する理解を深めると同時に、物事を判断する際には常に複数の視点を持つべきだという教訓を私に与えてくれた。

1週間という限られた滞在ではあったが、中国の街並み、人々、文化に直接触れることができたことは、私にとって大きな財産となった。今後も異なる国や地域に積極的に足を運び、自分の固定観念を更新し続けたい。そして今回得た自分の目で確かめる大切さを忘れず、今後の学びや行動に生かしていきたいと思う。

「中国での経験が変えた私の視点」

2-A 立教大学 齋藤由莉

私はこの訪中国に参加した目的を、自分自身の目で中国という国を知ることにかけていました。正直に言えば、渡航前の私は中国にあまり良い印象を抱いていませんでした。その背景には、日々目にするニュースやSNSでの情報が大きく影響していたと思います。中国に関する報道は、否定的な内容が目立ち、それらを繰り返し目にするうちに、無意識のうちに偏った見方をするようになっていました。一方で、前向きなニュースや文化交流に関する情報は十分に伝わってこず、私の中で中国に対するイメージは一方的に形作られていたと思います。訪中国では受け身で説明を聞くだけでなく、実際に様々な場所に足を運び、自分で見聞きし考えることで、中国をより深く理解したいと考えていました。先入観にとらわれず、現地での経験を通して自分の目で確かめたいという思いを持って臨みました。

訪中国で印象に残っているのは、日本と中国の争いに関する施設を訪れたことです。東北陥落史陳列館や九・一八歴史博物館では、当時の資料や写真、証言が数多く展示されていました。それらは教科書で学んできた知識よりもずっと鮮明で生々しく、歴史の重みを直接感じる体験となりました。通訳の方に訳してもらいながら、この争いの歴史を様々な角度で学ぶことができ、展示を通して中国の人々がこの出来事をどのように記憶し、後世へと語り継いでいるのかを肌で感じました。この経験を通じて、自分の中にあった歴史への理解は大きく深まり、同時に「同じ過ちを繰り返さないために何をすべきか」を考えるきっかけにもなりました。

他には、中国の大学生と交流したことが印象に残っています。訪中国のプログラムで、グループワークをしたり、学食を食べたり、文化体験をする機会がありました。最初は中国語を話すことができずに難しい場面もありましたが、互いに工夫しながら交流し、楽しみながらコミュニケーションができたと思います。お互いの国についてや大学生活についてなど、日本人の友達と変わらないような話題で盛り上がり、自然に打ち解けることができました。またプログラム外で、現地の大学生に話しかけてもらい、メールを交換するという出来事がありました。中国での初めての友達ができて、とてもうれしかったです。

この訪中国を通じて、自分の体験を通じて中国という国を知るという姿勢を大切にしていって一週間を過ごしました。中国に対して抱いていた一面的で否定的な印象は大きく変わりました。中国から帰った後は、中国語の勉強を始めてみたり、アルバイト先にいる中国の方と訪中国での出来事を話したりなど、つながりを広げていくことができている。また、中国で出会った方たちはもちろん、同じ訪中国メンバーとの縁を大切に、これからも交流を続けていきたいと考えています。今回の一週間は、単なる海外訪問ではなく、自分の価値観や考え方を大きく変える貴重な経験となりました。今後も先入観にとらわれず、自分の目で見て学ぶ姿勢を持ち続け、多様な価値観を理解できる人間へと成長していきたいです。

「文化と歴史から学ぶ日中関係」

2-A 班 青森中央学院大学 渋谷佳樺

今回私は日中友好大学生訪中国の一員として、初めて中国に行く機会を得た。北京、長春、瀋陽の三都市を巡り、万里の長城や故宮といった歴史的建造物、各地の博物館や大学での交流、さらには民俗文化の体験を通じて、文化と歴史の両面から日本と中国との関係を考える貴重な経験をした。

まず歴史の面からである。北京で訪れた万里の長城と故宮は、中国の歴史とスケールの大きさを実感させるものであった。特に万里の長城に立ったとき、想像を超える長さで険しい地形に圧倒された。防衛のためにこれだけの建造物を築いた歴史から、中国の国家観や国土防衛の意識を感じ取ることができた。また故宮では、明清王朝の壮大な宮殿群と精緻な装飾に触れ、中国文明が長い年月をかけて築いてきた文化の厚みを理解した。中国共産党歴史展覧館では、近代以降の中国がどのように独立と発展を遂げてきたかが、国家の歩みとして強調されていた。歴史の叙述は日本で学んできたものとは異なる視点を含んでおり、「歴史とは誰が語るかによって意味づけが変わる」という事実を実感した。また長春の東北陥落史陳列館や瀋陽の「九・一八」歴史博物館では、日本による満州支配や戦争の歴史が詳細に展示されていた。加害の側に立つ日本人として、こうした歴史を直視することの重みを痛感した。歴史を避けては日中の未来を語ることはできない。むしろ過去を共有し、そこから学ぶ姿勢こそが両国の関係に不可欠だと強く感じた。

一方で、文化の面からは人々を結びつける大きな力を感じた。長春での魚皮画制作体験や東北民俗文化との出会いは、中国の地域文化の豊かさを学ぶ機会となった。また吉林大学や瀋陽師範大学での学生交流では、日本と中国の若者が共通の関心を持ちながら率直に語り合えたことが印象深い。歴史の重みを抱えながらも、文化や交流を通じて新たな理解と友情を築くことができるのだと実感した。瀋陽の紅梅文創園のように、かつての工場跡地を再利用した文化施設は、新しい都市のあり方を模索する中国の創造力を示していた。中国工業博物館も訪れたが、そこでは近代化以降の中国産業の歩みが展示されており、製造業を中心に発展を遂げてきた中国の姿を理解することができた。

これらのことから、今回の訪中で私は「歴史は過去を学ぶための窓」であり「文化は未来を築くための架け橋」であると考えようになった。歴史の学びは、過去の過ちを忘れずに次の世代へと引き継ぐために欠かせない。そして文化の交流は、異なる国の人々を結びつけ、相互理解と信頼を育てる力を持つ。この二つの要素をどのように結びつけていくかが、今後の日中関係に大きく関わるものではないかと考えている。

私にとって今回の訪中は、日本と中国が歴史と文化を通してどのように関わり合ってきたのか、そしてこれからどう関わっていくべきかを考える契機となった。日中関係には複雑な課題があるが、私たち若い世代が歴史に学び、文化を通じて互いを理解する努力を重ねることによって、未来に向けて新しい関係を築いていけると考えている。今回得た学びを大切に、両国の架け橋となることを今後の目標としていきたい。

「多方面から物事を知ることの大切さ」

2A 班 神戸市外国語大学 杉浦真悠子

私は九月に日中友好訪中団の一員として七日間中国を訪れ、様々な人との交流や歴史博物館の見学を通して、多くの学びを得ることができた。今回の経験は、中国に関する知識を深めるだけでなく、自分自身の中にもっと中国を理解し、さまざまな人々に情報を発信していきたいという新たな気持ちを芽生えさせるきっかけとなった。

まず、訪中前に私が中国や中国人に抱いていたイメージについて触れておきたい。私の頭の中には、「とにかく何でも規模が大きい」「監視カメラが至る所に設置され、常に行動を監視されている」「はっきりと物を言い、早口で声が大きいので常に怒っているように見える」「近寄りがたい存在である」といった、比較的マイナスな印象が強く残っていた。実際に訪れてみると、確かに規模の大きさには圧倒された。一つ一つの博物館は、一日をかけても回りきれないほど広大で、人の数も交通量も多く、あらゆる面で日本とは比べ物にならないスケールの大きさを実感した。また、監視カメラについても実際に目にしたが、それは単に「監視社会」という側面だけではなく、広大で人口も多い中国において安全を守るための仕組みでもあることが理解できた。高速鉄道に乗車する際には荷物検査があり、社会全体を厳重に管理していることに感嘆した。訪れる前には否定的に感じていた点も、実際にその背景や理由を知ることによって、別の意味合いを見いだせたのである。特に印象に残ったのは、東北陥落史陳列館を訪れたときの体験である。そこで私は、日本がかつて「細菌作戦」と呼ばれる非人道的な行為を行っていたことを初めて知った。人体実験や動物実験を繰り返し、何も知らされずに研究に携わった人々が、まさか中国の人々に病気を発生させる銃弾の作成に関わっていたとは想像もしなかったであろう。また、中国の民衆に対する拷問や、強制収容所に収容して労働を強いた事実など、日本の学校では教わる機会のなかった歴史を現地で学ぶことができた。この体験は、日本人として自国の歴史を多方面から知る重要性を強く意識させられる出来事であった。一方で、人々との交流から得た印象は、訪中前に抱いていたイメージとは大きく異なっていた。店員やホテルスタッフの方々はとても親切で、私が中国語やアプリの使い方に困っていると、翻訳アプリを使って助けてくれた。朝食のビュッフェでは羊肉のスープの食べ方を丁寧に教えてくれ、代わりに用意してくれるなど、世話好きで温かい人が多いと感じる場面がいくつもあった。このような体験を通じて、人々は決して「近寄りがたい存在」ではなく、むしろ親しみやすい存在であると実感した。また、今回の訪中で出会った程先生との会話は、私にとって一つの大きな発見であった。私は先生に「なぜ中国の人々は道端で人目を気にせず大きな声で話しているのか」と質問した。すると先生は、「街中では車のクラクションが頻繁に鳴り、人通りも多く、小声では相手に聞こえない。そのため大きな声で話す必要があるのだ」と説明してくださった。その言葉を聞いたとき、頭の中に稲妻が走るような新たな気づきを得た。自分が「大声で話しているから怒っていそうにみえる」と感じていたこと

も、生活環境を考慮すれば必然的な行動であったのだ。

今回の訪中を通して、私は中国の大きさや歴史の重みを体感すると同時に、人々の温かさに触れ、これまで抱いていた先入観を見直すことができた。そして、異なる文化や歴史を知るには、自分の立場からだけではなく、相手の立場や環境からも理解しようとする姿勢が必要であることを学んだ。この経験は、これから私が中国語を学び、中国についてさらに深く理解していくうえで大きな財産となるだろう。

今回の訪中国で得た学びを活かし、今後は日中友好の懸け橋となれるような存在を目指したい。物事を多方面から捉える視点を持ち続け、互いの文化を理解し合う努力を重ねていくことが、これからの日中友好を築く第一歩であると確信している。

「私の中国更新」

2-A 班 東京外国語大学 住岡凜々子

今回の訪中を通して大きく3つの観点から中国を捉え直すことができた。

まず、中国の技術力だ。私が想像していた何倍も中国は発展していた。中国は発展途上国だ、というイメージが強かった私にとって、到着早々北京空港の規模の大きさ、洗練された建物のつくりには驚いた。空港内を専用の電車で移動したのが印象的だった。決済はQRコードが普及し、この訪中期間の中で一度も現金を使わなかったことを考えると日本に比べてキャッシュレス化が進んでいるように思えた。路上でトラクターにフルーツを乗せ、販売しているお店さえもQRコードを貼り付け非現金決済をしていた光景にはギャップすら感じた。中国共産党歴史展覧館を訪問した際には中国の各都市をバーチャルで回るアトラクションを体験したが、滝の映像では実際に水滴が降ってきたりと五感に訴えかける仕掛けが刺激的だった。今回、いくつもの中国の展覧会や博物館を訪れることができたが、各分野において中国がかかる並々ならぬエネルギー、そして可能性を感じた。

次に現地の中国人についてだ。訪中期間中、現地の学生、ガイドさん、ホテル、レストランやお店の方含め多くの中国の方に出会った。もちろんガイドさんや日本語学科の学生には日本語でたくさん中国について教わったり日本について説明したりと貴重な交流ができた。しかし歩街の中に飛び込むと、率直な感想として自分が思っていた以上に英語が通じなかった。飲み物を買う際、トイレの場所を聞く際、いろいろと英語で言い換えてみたものの全く伝わらず困っていたところ隣で中国語を勉強している班員が1つ中国語の単語を言うと一発で聞き取り微笑んでくれた。中国語を使った瞬間2人は通じ合えたように見えた。ハッとした。たとえ1単語でも中国の人の言葉で話しかける、歩み寄ることが大切だと痛感した。私はよく東南アジアに旅行に行くのだが、東南アジアでは観光地のお店では特に英語や日本語で勧誘される。中国の人は中国語が話せないであろう観光客に対しても早口の中国語で話しかけるのだが、その姿勢には彼らの母国語への誇りを感じた。それと同時にだからこそ外国人は中国語を使うことで中国の方へスペクトを示すことができ、英語や翻訳機を通した表面的なコミュニケーションではなく中国の人と真に通じ合えることができるのではないかと考えた。次回中国に行く際にはもっと中国語を勉強してから訪れて中国の方とより分かり合いたいと思った。

最後に歴史に関してだ。今回歴史博物館として東北陥落史陳列館と「九・一八」歴史博物館を見学したが、両博物館共に展示品の説明には日本語訳が並列されており、ほとんどの博物館で中国語の説明しかなかったことを踏まえると、あえて日本語で説明文が載せていることに日本人に理解してほしい、という中国側の思いを感じた。中国視点での事件の展開等を知り、日本では日本の都合のよいように解釈されている部分があるのではないかと疑問が湧いてきた。同じ歴史に対しての見方の違いが両国のズレを生み、これが行き過ぎると半日感情であつたり日本の中国に対する悪いイメージにも繋がっているのではない

かと考えた。ガイドの人が有名と紹介していた人物は日本の学校教育では学ばない人であったり、日本の残留孤児を中国の里親が大切に育てたという話も初めて聞いた。侵略してきた国の子どもを育てることがいかに大変なことか、中国人の情の深さを感じた。「九・一八」歴史博物館で最後にこんな言葉を見つけた。「歴史を学ぶとは憎しみを溜めるのではなく平和の尊さを感じることである。」心に響き、この言葉を胸に刻んでこれから生きていこうと思った。

「肌で感じた中国」

2-A 班 法政大学 中島孟琉

私は大学のゼミで中国経済について学んでいる。授業や本、ニュースを通じて知識を得ても、結局それは机の上で学んだことに過ぎない。「実際の中国はどうなっているのか」「数字や文章だけでなく、自分の目で確かめなければ本当の姿は分からないのではないか」と思うようになり、今回訪中団に参加することを決めた。

ゼミでの学習やテレビ、インターネットを通じて得た情報から、私の「中国」に対するイメージは、壮大な歴史や迫力ある建築、世界をリードする先端技術などポジティブなものが多くある一方で、大気汚染や経済格差といった問題も抱え、さらに昨今の報道では強い反日感情があるように見えて少し怖い、というものだった。

実際に北京に着いてまず驚いたのは、その空気や街の綺麗さだった。思い描いていたような灰色の空気ではなく、澄んだ青空が広がっていて、その瞬間に自分の中の固定観念が少し崩れたように思う。そして万里の長城や故宮を訪れた際には、想像を遥かに超える規模と迫力に圧倒され、胸を打たれた。

その後、長春や瀋陽といった地方都市を巡る中でも、街の発展ぶりに驚かされた。京大街西歴史文化街区や「老北市」と呼ばれる伝統市場では、歴史と現代が交錯する独特の雰囲気を感じることができた。

また、訪中2日目の歓迎レセプションでの出来事が特に印象的だった。中日友好教会の方が「多くの中国人は戦時中の一部の日本人と、今を生きるあなた方を別のものと捉えている」と言った旨のお話をしてくださった。その言葉を聞いたとき、それまで少し感じていた不安がずっと軽くなり、心が温かくなるのを覚えた。

一方で、中国共産党歴史展覧館や東北陥落史陳列館、「九・一八」歴史博物館などを見学する中で、当時日本がしてしまったことの重さを改めて受け止め、忘れてはいけない歴史だと強く感じた。友好や未来志向を大切にする一方で、過去を直視し続けることの重要性を実感した瞬間だった。

さらに、現地の学生との交流では、日本の文化を愛してくれている若者が多くいることを肌で感じた。アニメや食文化などを通して自然に打ち解けることができ、国境を越えて同じ世代として共感し合える喜びを味わった。また彼らと連絡先も交換し帰国してからも交流をし続けられていることも今回の訪中の大きな収穫だったと思う。ただ、自分自身の中国語のレベルがまだ低く、思うように意思疎通ができなかったのは少し悔しいところであり、今後の課題だとも感じている。

今回の訪中を通じて、現地の学生と交流し、街を歩き、歴史や文化に触れることで、データや数字だけでは見えてこない「生きた中国」を知ることができた。そしてそこで暮らす人々の文化や考え方を尊重する姿勢を持つことが、学びにも人生にも大切だと実感した。こうした経験を積み重ねることこそが日中両国の相互理解と信頼を育み、未来の友好につ

ながると信じている。私は今回得た学びを、今後の人生に活かすとともに、日中友好の一助となれるよう努力していきたい。

「中国の「光と影」が教えてくれたこと」

2-A 中村仁咲

訪中国の一員として中国を訪問し、歴史と文化の深さに触れる貴重な機会を得ました。この旅は、教科書やメディアを通じて知る中国とは異なる、生きた中国の姿を私に教えてくれました。特に、万里の長城と 918 歴史博物館の訪問は、私の心に深く、忘れられない印象を残しました。

まず、万里の長城を訪れた際の壮大な景色は、今も目に焼き付いています。目の前に広がる圧倒的なスケールに、私はただただ言葉を失いました。その急峻な階段は、高さが不揃いで、登るだけでも一苦労でしたが、当時の人々が手作業でこれを築き上げたことを思うと、その途方もない労力と精神力に畏敬の念を抱かずにはいられませんでした。彼らがどうやって馬を使い、あの手すりもない急な傾斜を登ったのか、想像は尽きません。

長城の上では、多くの外国の方が「こんにちわ」と親しげに話しかけてくれました。彼らが現地の人なのか、それとも商売人なのかは分かりませんでしたが、その何気ない交流が異文化の壁を溶かすように感じられました。また、見ず知らずの人にスマートフォンを預けて写真を撮ってもらう行為は、今思えば危険だったのかもしれないかもしれません。しかし、無事に手元に戻ってきたことは、海外での貴重な体験として心に残っています。この旅の初日で学んだのは、生きるための知恵とも言える「値切り」の技術でした。友人から聞いた金額を基準に交渉するスキルは、現地ならではの交流の形であり、日本で使う機会は少ないかもしれませんが、非常に大切なコミュニケーションの力を感じました。

次に、瀋陽にある 918 歴史博物館を訪れました。私はこれまでもいくつかの博物館を見ましたが、これほどまでに日本との「負の歴史」を強く形にした場所は初めてでした。館内に展示された当時の写真や資料は、日本の軍国主義が引き起こした悲劇を雄弁に物語っており、それらを前にすると、中国の人々が日本に対して強い嫌悪感を抱くのも無理はないと痛感しました。

以前、中国で日本人が殺傷事件に巻き込まれたニュースを聞いた際、「なぜ無差別に傷つけるのだろう」としか理解できませんでした。しかし、この博物館を訪れたことで、その背景にある深い歴史の痛みを少しでも理解できたように思います。歴史のせいにして片付けるべきではありませんが、日本人として、このような歴史が確かに存在したことを頭に刻む必要性を強く感じました。日本の戦争教育や報道が「被害者」としての側面を強く強調する傾向にあることも、考え直すべき課題だと感じました。私たちは「加害者」であった側面からも目を背けては

なりません。この事実を認識していなければ、国際社会に出たときに、思わぬところで恥をかくことになりかねない、と身が引き締まる思いでした。

今回の訪問は、万里の長城が象徴する「過去の偉大な努力」と、博物館が突きつける「向き合うべき過去の真実」という、全く異なる二つの側面を体験するものでした。これらの経験を通じて、私は歴史を学ぶことの重要性と、より広い視野で物事を捉えることの必要性を深く学びました。

「歴史を学び、歴史から学ぶこれからの日中友好」

2-A 班 都留文科大学 夏田和香菜

まずは、この訪中団に参加した理由として、中国人の友人との出会いから中国人の人格や中国の歴史について興味をもったからである。実際に中国に行ってみて思ったことは、都市によって、街の雰囲気が全然違うということである。それぞれの都市に特徴があって、一概にこれが中国！と断定出来ないことを実感した。しかしどの都市に訪問しても、共通して感じたことは、私の友人にも感じたストレートな優しさである。家族や友達を大切にする文化がある中国人は、もしかしたら日本人からしたらお節介と感じてしまうほど、大変優しくそれがストレートに伝わってくる。そんな心優しい中国人にたくさん助けられた訪中であつた。

私が今回の訪中の中で一番心に残っていることは、「九・一八歴史博物館」を訪れたことである。満州事変の発端となった柳条湖事件の当時の様子について知ることができた。柳条湖事件が起こったのは1931年9月18日で、日にちが近かったこともあり、緊迫した様子が漂っていたように感じた。また、当時の写真が思っていた以上に生々しく残っており、どれだけ悲惨だったかを物語っていた。これまで教科書の中でしか知らなかったことが、初めて現実に起こったこととして結びついた瞬間だった。また、この博物館を初め、7日間訪中する中で、カメラを向けられることが多く、良い意味でも悪い意味でも、自分達の行動や言動が中国や世界からみる「日本人」の印象に直結するということを感じた。

そして、私が訪中で感じたことの1つとして、言語の大切さである。当たり前のことであるが、本当の意味での友好を進めていくためには大変重要なことではないかと感じた。自国以外の国を訪れるなかで、一番最初にぶち当たる壁であると同時に、他国を知る上で一番大切なことだ。言語が通じなければ、その先に進むことはできない。今回の訪中では、ガイドさんが終始日本語で説明してくださり、班の中に中国語が堪能な班員がいたおかげで、現地でコミュニケーションをとることができた。また、携帯の翻訳機を使って、店員さんと意思疎通をすることもできた。しかし、この交流の仕方でも、本当の意味で心の通じ合った交流が出来ていただろうか。今日、外国語を学ぶ意義について多くの意見があるが、本当の意味で心を通じ合わせ、言葉を交わすことの大切さについて見をもって感じた。

私が今回この訪中団で知った中国はほんの一部であり、中国という大国を知るきっかけにすぎず、この訪中で感じたことをもとに、より深く歴史を勉強すること。そして、政治的緊迫やメディアの影響で一筋縄ではいかないことが多いが、お互いの妥協点を探りあい、今回の訪中団で培った友情をこれからも大切に、少しでも日中友好の架け橋になるような交流をしていきたい。

また、来年から教員になる身として、自分にとって一番大事な役割は、この訪中団での経験を次世代の子ども達に伝えていくことだと考える。この訪中団で感じた中国や、中国

の歴史、日中の関係について包み隠さず子ども達に伝えていきたい。また、子ども達には、教科書に書かれていることを鵜呑みにせず、自分の頭で考え、他者と共有し、時には実際に自分で足を運んで、考え続けていってほしい。私自身、高校まで歴史の授業があまり好きではなかったが、今回の訪中をきっかけに、日中の歴史を学び直し、歴史を学ぶことの意義や楽しさを感じた。暗記する歴史ではなく、どうして歴史を学ぶのか、その歴史の教訓からどのように中国や世界中の国とより良い関係を築いていけるのかを大切にしていきたい。

100人規模で行く海外。後にも先にももう無い機会ではないだろうか。100人同時に動くということ。1人の大人として責任ある行動をすることの大切さを学んだ。また、日中交流をしたと同時に、日日交流の中で、自分に無い知識を持っている団員や、積極的に交流を行う団員、エネルギッシュな団員と交流する中で、多くの学びがあり、感化された7日間であった。特に2Aの班員といる時間が長く、2Aのおかげで今回の訪中を有意義なものにでき、この出会いを大切にしていきたい。

最後に、この訪中団に関わってくださった全ての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

「距離を超えた隣国」

2—A 上智大学 平川翔

訪中前の私は大学生の訪問や交流が本当に二国間関係に良い影響を与えられるのか、日中友好という壮大な目標に少しでも近づくことができるのか、あまり自信はなかった。しかしながら、1週間の訪中日程を振り返りその考えが少しずつ変化していることに気づいた。私は訪中を終え日本と中国が「近くて遠い国」から「距離を超えた隣国」になれると確信している。もちろん難しい関係にある両国が無条件に友好関係に転じることは簡単なことではない。なぜなら一般的に日本人が考える中国、中国人のイメージと実際の彼らの姿というのは偏見や誤解に溢れており、その逆もまたしかりで彼らからみた私たちはきっと本来の姿とは離れているからだ。しかし、だからこそ、相手のことをよく見て理解しようとする姿勢を持ち、お互いを尊重し合うことが最も大切なのだろうと今回の訪中を通して強く感じた。

中学生時代に中国で生活していた自分にとって今回の訪中で新しい中国との出会いや想像を超える発見は少なかった。しかし、日本との価値観の違いやコミュニケーション方法、習慣、風習に魅了され圧倒され、こんなにも近い国にも関わらず海を跨げば全く違う世界が広がっていることに改めて感動を覚えた。加えて、訪中では中国人および日本人の学生と交流の機会がありとても良い刺激を受けた。各々が異なる思いを持ちながらも日中友好について真剣に考え、一緒になって中国現地を訪問したことで学びが深まった。1人で訪問する以上に周りの人との会話によって自分の思考がより鮮明になったように感じる。一瞬にして過ぎ去った7日間で唯一新しい気づきがあったがそれは中国人の平和を願う心である。自分が住んでいた際には両国関係について興味を持ち学んだことはあったものの、実際に中国人と交流したり意見を交わしたりすることはほとんどなかった。今回の訪中で彼らの価値観を垣間みることができ、新たな学びとなった。また、私は祖母が戦争中に満州で生まれた日本人であり中国東北部で戦争の歴史を巡る今回の訪中は個人的に大変貴重な経験だった。訪問先の中で特に印象に残ったのは東北陥落史陳列館と九一八歴史博物館である。博物館での展示や解説を通して日中戦争の歴史とその側面を知ると、戦場に立ち無意味な争いで命を落とした全ての犠牲者、そしてその歴史を乗り越え共に平和なアジア社会を築こうとする中国人の寛大さに自分は生かされていることを実感し、同時に、死ぬまでの一分一秒無駄にしたいと考えるようになった。

今日においても日本と中国は「近くて遠い国」と揶揄されるような難しい関係性であると私は考える。しかし、世界の発展、とりわけ東アジア地域の平和と安定には日中の意思疎通と友好関係の構築が必要不可欠である。私たち訪中団が行った青年交流は両国を引き寄せ、未来志向の関係を築くきっかけになるはずだ。私は今回の訪中を通じて学んだことを改めて見つめ直し、将来的に日本と中国の架け橋になれるような存在になりたいと思う。まだまだ未熟な大学生だが日中友好に少しでも貢献できるよう精進していきたい。

「風化させてはいけない歴史の数々」

2-A 班 清泉女子大学 宮嶋花怜

私が訪中を終えて考えたことは、歴史館や博物館での経験を通じて、「戦争の悲惨な歴史を忘れてはいけない」と改めて強く感じたことです。今回の6泊7日の訪中にて、私は7つの歴史館や博物館を巡りました。特に、九・一八事件（柳条湖事件）の発生日に近い日程だったため、事件と関連の深い東北地方の「長春」や「瀋陽」にも訪れました。

その中で最も印象的だった出来事として、瀋陽にて訪れた「九・一八」歴史博物館があります。そこでは、日本軍が柳条湖事件を引き起こした経緯から、終戦後に裁きを受けるまでの出来事が展示されていました。歴史の授業にて、日本軍が柳条湖事件にて過ちを犯したことを学んでおり、実際に教科書内の写真を通して、爆破後の線路の様子などを見たことがありました。しかし、博物館の展示からは被害者側の痛みや苦しみが、私の想像をはるかに超えるものであったことを心から実感しました。この博物館では、非常に多くの当時の写真や武器、衣服など、確固たる証拠が数多く並んでいました。それらに触れることで、私はこの事件について「知っているつもりで、実はあまり知らなかった」のだと痛感しました。例として、日本軍は事件現場である奉天（現在の瀋陽）にて、多くの無実の市民を虐殺しており、その殺害方法や遺体の処理などが非人道的行為とってよいものでした。ギロチンやウイルスを用いて殺害したことや、遺体が電柱に吊るされていたこと、頭部だけが地面に放置されている写真を見て、このような事実を知らずに生きてきた自分の無知を悔しく思い、そしてやるせない気持ちになりました。同時に、この悲しい事実を、私たちの若い世代が風化させてはならないと強く感じました。

そのような残酷な歴史を持つ両国間にも、心温まる人との繋がりがあることを知りました。それは、「残留孤児」と現地の義父母の関係です。「残留孤児」とは、第二次世界大戦後に中国に取り残され、現地の家庭で育てられた日本人孤児のことです。日本の敗戦によって家族が分断され、多くの子供たちは現地に取り残されました。博物館内では、残留孤児とその子を育てた中国人夫婦の石像がありました。自国の国民を大量虐殺した敵国の子供をなぜ引き取ることができたのか。孤児を引き取った理由としては様々ありましたが、帰国後に読んだ記事では、病気を患っている残留孤児のために、治療費を稼ごうと必死に働いた中国人夫婦の例がありました。残留孤児に関しては、日本から調べると意見は賛否両論となっており、「農作などの労働力として孤児を引き取った」という話や、「善良な中国の人によって引き取られ、国交回復後、孤児が日本に戻っても大切に思い続けている」という話など様々でした。この歴史を通して、私は国籍や歴史を超えた人間愛を目の当たりにしたように感じました。

今回の訪中を経験して、「戦争の歴史は双方の視点からの事実や証拠を丁寧に知ることから始まる」という結論に達しました。ニュースやSNSだけでは、情報が偏ってしまいます。様々な視点から情報を得て、自分の中でその事実を一つひとつ消化し、今後に向けた考え

や行動を決めていく必要があるのだと考えます。学生として、学ぶ立場である私が、このような気づきを得られたことは大きな財産です。この経験から、今後の学びや活動に、より一層自分らしく向き合っていきたいと思います。

「日中友好の第一歩」

2-A 神奈川大学 矢次貴洋

私は、2025年9月8日から2025年9月14日まで、日中友好大学生訪中団として、北京・長春・瀋陽を訪問した。私たちが訪問したのは、旧日本軍による柳条湖事件が発生した「九・一八」を目前に控えた時期の中国東北部であり、街の様子や現地の市民の様子などが想像できず、怖いと感じた反面、私たち日本人が実際に訪中・見学することへの純粋な中国の人々の反応というものは、非常に興味を惹かれるものであった。

2日目に中国共産党歴史展覧館を訪れた。日本近現代史を専攻している私にとって、今回の訪中事業で最も興味惹かれる場所だった。展示内容も豊富で、中でも印象に残っているものが、中国の各都市の映像を4DXで巡るというもので、日本の博物館では体験することのできないようなアトラクションであった。様々な博物館を見学したが、中国は良い意味でも悪い意味でも文化や歴史についての展示が非常に上手いと感じた。良い意味としては、万里の長城や紫禁城などの有名な世界遺産を多く抱え、文化大国であることを全面に押し出している中国では、古代の実物の展示品が巨大な博物館に所狭に並べられ、一つ一つの展示の仕方に工夫が凝らされていた。その上でこれらの施設は博物館内を含め基本的に撮影が可能であり、観光客だけでなく一般市民たちも博物館に興味を持てる工夫がなされていた。加えて中国の人々も博物館への興味が高い様子で、私たちが訪れたほとんどの博物館で、展示を見ながら話し写真を撮影する多くの現地の人々の姿があり、この点は日本と中国の大きな違いの一つだと感じた。悪い意味としては、私のルームメイトの友達とも話題になったことだが、展示の仕方が非常に上手く退屈せずに内容が入る分、事前に歴史的な背景や現状をよく理解して見学しなければ危険であると感じた。例えば、共産党展覧館で見た映像では、当たり前のように台湾や香港が中国の一部として紹介され、抗日民族統一戦線で共産党と共に戦った国民党の名前がほとんど出されないなど、現在の中国に都合の良い面だけを映しているということは頭に入れるべきだと感じた。

北京の次は、いよいよかつて満州国と呼ばれた中国東北部に足を踏み入れた。日中関係の一大転換点となった満州事変の中心地に、日本人である私たちが入ることに若干の不安を抱えながら、実際に吉林大学と遼寧大学という中国を代表する2大学を訪問した。吉林大学では日本語学科の学生たちと交流したが、そこで私たちは彼らが持つ、アニメをはじめとした日本文化へのリスペクトを感じた。特に驚いたことは、グループワークをした吉林大学の学生たちは皆日本語が堪能であったことだ。その上で私は、「世界人口の70分の1ほどしか話者がいない異端であり特殊な言語を、他の国の学生たちが日本文化をよく知り受け入れるために学んでくれているありがたさ」について感じるべきなのだと考えた。遼寧大学では、現地の学生たちに混ざって餡細工や切り絵などの伝統的な中国文化を体験することができた。ここで感じることは、彼らが持つ中国の伝統的な「もてな

す」という文化だった。両大学の学生の他にも、私たちを案内してくださったガイドさんや、現地のホテルや飲食店のスタッフの方など、今回の訪中事業で現地の方達と交流する機会は数多くあった。もちろん 14 億の人口を抱える国であるから、皆が彼らのような人間ばかりではないということは十分承知しているつもりであるが、少なくとも今回私たちに関わってくださった現地の方たち皆から、私たちが心の底から楽しんでもらいたいという気持ちを感じ取ることができた。これは、彼ら中国の人々が古くから築き上げてきた伝統的な「もてなす」文化に基づいたものであるとともに、私たちが言うには烏澹がましいことであるのは承知の上で、彼らが「過去の歴史」で私たちのことを見ているのではなく、私たちのことを「日本からやってきた友人」として見てくれているのだと感じた。

今回最も印象に残ったことは、抗日戦争の歴史を伝える九・一八歴史博物館の展示の説明文に、中国語と英語に加えて日本語が記載されていたことだった。この意味について私は、中国の人々だけでなく、私たち日本人にも、かつての日本という国が中国で行ってきた過ちというものについて知ってほしいという、中国の人々からのメッセージなのではないかと感じた。今回の訪中事業を通して、中国の人々が過去の歴史と切り離して私たちのことを見てくれていることは切に感じる事ができた。ならば、日本人である私たちにできる第一歩とは、過去に日本が犯してしまった罪というものを正しく認識し、改めることなのではないかと考えた。